

出会い (6)

奥村 一郎



奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリック修道会、カルメル会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年よりバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。著書は、『断想』『主とともに』『祈り』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンス宗教研究所) など多数。

その時、なにがあったのか？

なににもなかったといえば、嘘になる。

なにかがあったといえば・・・？ (続)

1. 虎穴に入らずんば虎児を得ず

さて、法学部は卒業したものの、肝腎の問題は、なお未解決。今となつては、「虎穴に入らずんば虎児を得ず」とばかり、カトリック陣営の本丸に突入するしかない、と腹を決めた。高円寺教会でのバイブル・クラスは、前記(Vitalite vol.26, 1998年1月)のように失敗に終わったが、その後、吉祥寺の神言会修道院で集まりをもつようになってから息を吹き返し、そのうちにカトリックの司祭や信者の知りあひも多くなり、教会の様子も分かりかけると、カトリック神学の牙城といわれるものには、イエズス会とドミニコ会の二つの修道会があることを知った。そこで、当時、評判の高かったフランス人宣教師S.カンドウ神父のすすめと紹介でそれぞれ東京の上智大学と京都の聖トマス学院の門を叩くことになった。

ところが、今思えば、それも神の摂理といえるのか、全くヒョンなことで、二つとも流れてしまった。そこで、東大に逆もどり再入学、宗教学科に籍をおくことになった。

虎児を得るため虎穴に入ることはできなかったが、虎穴に向かって猛火をあびせる火炎放射器の製作には東大での講義は恰好の場となった。

学科主任岸本英夫教授は、法学部にいた頃からすでにモグリで聴講していたので、顔見知りでもあり、その生いたちにも関心があつた。岸本先生はもともと、敬虔なクリスチャンの家庭に生まれ育ちながら、若くしてキリスト教に失望し、離教、宗教学者の道に入られたと聞いていた。講義の間に、折々口にされた言葉が思いだされる。

「宗教学者になろうと思うものは、どの信仰ももってはならない。なぜなら、一つの宗教に入れば、その信仰の色眼鏡で他の宗教を見るようになるからである。学問は、すべての物事を客観的に見る誠実な知性をもたねばならない。我田引水の主観的な見方はゆるされぬ。だが、宗教というものは、信仰をもたなければ、その真髄がつかめない。これが、宗教学者のジレンマである」

その他、小口偉一教授の「宗教社会学」の講義では、後にオリент学会々長になられた三笠宮殿下と同席、研究室の窓ぎわで話し合ったことも思い出になった。聖書学やキリスト教、とくに、バルト神学の講義、その他、比較宗教学、比較文化論や、西洋哲学、印度哲学、倫理学などで出陣、中村元、和辻哲郎教授の講義を聴くこともできた。残念ながら東大の講義に欠落していた中世哲学は、岩下壮一著『信仰の遺産』や『カトリックの信仰』、吉満義彦の著書などで独学しなくてはならなかった。

授業の合間や終わりには、今はすっかり現代西洋風に模様替えをしてしまった、かつての「山上御殿」の足元にある「三四郎池」の水辺に腰をおろし、考えの溢れるがまま、日の暮れるのも忘れてノートを書き続けた。雨の日は空いた教室やロックフェラー図書館の中にもこもりながら。その間に年月は流れ、やがて2年半、論文の基本的部分はできあがり、新しい周辺の知識による補強作業に入りはじめていた。それも、まもなく終了、1948年6月半ば頃、論文が完成した。

その頃は、ワープロもなかったので、その後の仕事としては、再度、論文を読み直すとともに、清書するということがあった。

2. 蟹気楼—白紙の聖書と黒焦げのキリスト

ところで今思えば、愚かな悪戦苦闘のひとり相撲でしかなかった自我流の反キリスト論を書き終えたときは、それなりの満足感と、未来の大空を飛ぶ期待に胸もふくらむ思いであった。若かっただけに、疲労というより、次の飛躍をめざしてのひと時の解放感を味わうなかに数日が流れた。

そのある日のこと、東京武蔵野にある、井の頭公園の人通りの少ない小道をひとり散策していた。昼すぎ2時頃であつたかと思う。突如、眼前に白亜の巨城が蟹気楼のように浮かんできた。と、見上げる間もなく、こちらに覆いかぶさるように、崩れ落ちてきた。天を引き裂く稲妻のような一瞬の心象ドラマ。

思わず足を止めると、その廃墟に悄然として立つ影のような自分の前に、二つのものがあつ

た。まず、表紙はまっ黒、中は全く白紙の聖書。次に、気味悪いほど黒焦げになったちっぽけな木片のキリスト。生来、奇跡アレルギーの私であるだけに、思いがけない出来事に戸惑った。しかし、まもなく、その謎が解けてきた。

「白紙の聖書」とは、主題の欠落した聖書の象徴。事実、聖書の主題とは、キリストの奇跡と、その教訓にある。ところで、私が書きあげた論文の骨子は、その重要な二つの主題の否定にあつた。まず、福音書の中の奇跡を一切否定。次に、比較宗教学、とくに、仏教との比較からの結論として、福音的教訓には他宗教に勝るものはなにひとつ見られないということであつた。私の見た「白紙の聖書」とは、そうした聖書の全面的否定の象徴を意味していた。次に、「黒焦げの小さいキリスト」には、また別の意味があつた。私には、キリスト自身に対する敵意や反感は全くなかつた。むしろ、エルナンの見た「人類の比類なき師キリスト」の実像にこよなく憧れていた(前号Vitalite vol.27)。そのため、奇跡によって神話化されたキリストの虚像を打ち壊すことに必死になった。しかし、その結果、白紙化された聖書から現れたキリスト像は、まさしく、惨めなまで黒焦げになった、ちっぽけなキリスト像でしかなかった。キリストという虎児を求めて虎穴に入ろうとした私が、火炎放射器で猛火を浴びせた虎穴の奥に見いだしたものは、黒焦げになった小さな死体の虎児キリストであつた。「白紙の聖書」と「黒焦げのキリスト」が、その直前に見た、崩壊する白亜の巨城と重なりあつて、私は愕然とした。と同時に、魂の奥深くから、三つの言葉が突きあげてきた。

「論文は完全に間違いであつた。奇跡のないキリスト教はあり得ない」*

すぐに語をついて、「今、私は、たとえ聖書

